

記録

佐伯水炭のおもかけ (続き)

忘れられつつあるその生産技術

会員 青木 壽 男

(宮崎県えびの市小田二二)

② 土佐改良式

下 窯の構造

窯形 奥行九尺の場合、横中を短かくし、最大横中は奥行を四分六分に分け、窯口より六分奥に入りたる所とする。

土 囲

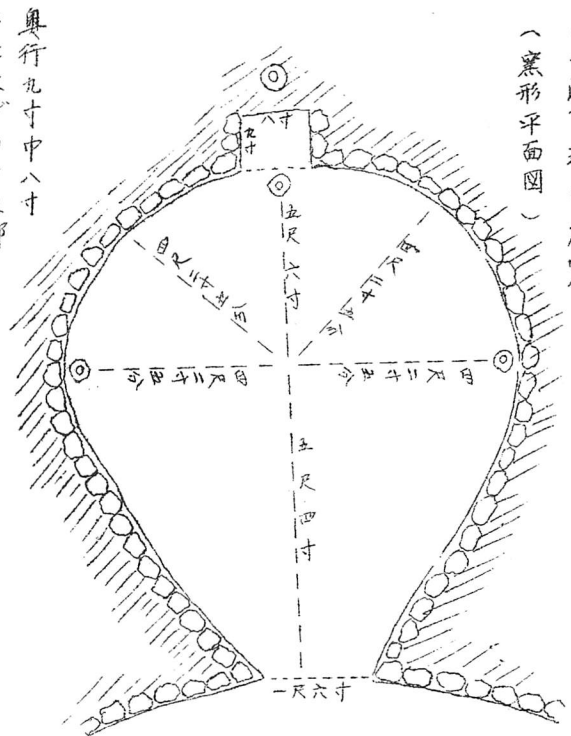
小石をもつて積上げ、窯口に近いところは練積にし、最大横中より後方は一尺につき一寸乃至一寸五分の傾斜を付ける。

窯口 高さ四尺、上部の中一尺二寸、下部の中一尺八寸に築き完成した後造作土を付けて、高さ三尺八寸上部中一尺下部一尺六寸に造りあげ、窯口は組石をもつて柱石にかえ練積とし、掛石の上部も全部練積とする。

床 張 床は粘土を四五寸厚におき、よく打固め、一尺につき三分乃至三分五厘までの勾配をつけ、窯口一尺五寸の所に勾配の約六割内外の逆勾配をつけ造り上げる。水気のある所は暗渠をつくるが、床下に小石を敷き、その上に床をはる。

煙道 上部(出松口)、中部、下部(不動料)の三部に分けてつくり、中部は直径四寸にして、下部不動料は高さ一尺五寸奥行一尺三寸中一尺二寸としてつくり、

土佐改良式自炭窯 (窯形平面図)



奥行九尺中八寸に仕上げる。上部

出松口は径四寸のまま第一回の製炭をなし、第二回又は第三回目の製炭をする時に、径一寸五分乃至二寸五分に縮少する。

天 井

天井の盛高さは、奥行の一尺につき五、二寸

づつ盛上げ、厚さは窯の大小により三寸より五寸までの締上げとする。

口掛及び竈口

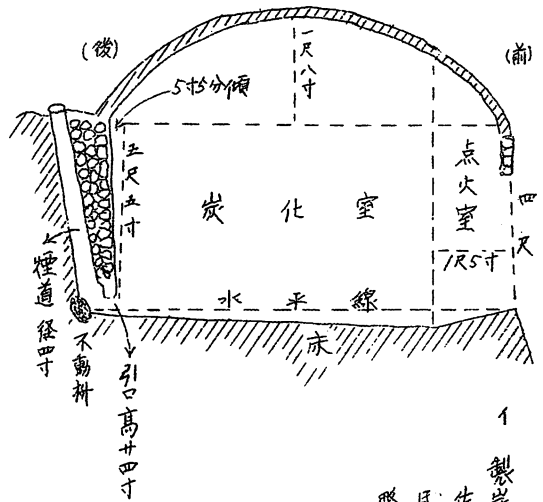
口掛(窯口塞壁)は、床付より一尺

二寸乃至一尺五寸上りたる所に張石(捍石)をかけ練積とする。竈口は床付の所に設け、直径一寸五分にして三個を常とする。これを二個にしてよい。竈口は點火状態、窯の性能状態により適宜加減する。

(以上前掲平面図及び次頁上段縦断面参照)

お断り、原稿は別紙に部分図を添付するも後面の都合から省略す。

土佐改良式 (縦断面)



1

製炭法

佐伯在来式と氏  
氏同様につき省  
略する。

③ 備長式

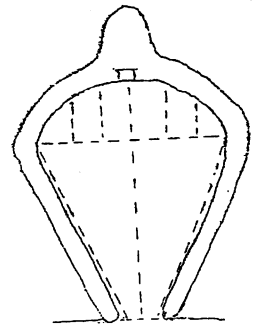
ア 窯の構造

炭化室は奥行八尺五寸、最大横中六尺五寸（後端より  
奥行の二〇%のところ）とする。よう壁は高さ六尺五寸  
（奥行の八二%）厚さ一尺とし、前後壁とも後へ五寸五分  
（八・四%）傾ける。よう底は無花果形とし、勾配は水平と  
する。

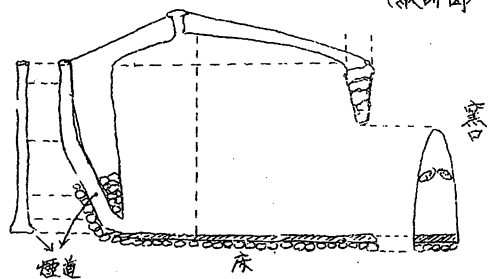
かま口は高さ四尺（揮石は二尺一寸七分）、横中上部九  
寸、下部一尺六寸とする。

排煙口は高さ前方一丈八分、後方三寸、横中七寸、奥  
行下方五寸、上方六寸とする。煙道は高さ六尺五寸五分、  
横中七寸（下方）奥行五寸（下方）とし、勾配は高さ一尺四  
寸のところ七〇%、三尺四寸のところ四五%、五尺四寸  
のところ二五%、六尺五寸のところ一五%、平均四〇%

備長窯 (平面図)



同 (縦断面)



である。

煙道口は二十寸角とする。

天井は厚さ五寸とし四〇%の  
勾配とする。最高部は後壁より  
三尺のところ（奥行の一四%）と  
し、一尺二寸とする。

イ、製炭法

在来式、または折衷式とほぼ同様な製炭法であるので  
省略する。

④ 佐伯折衷式

ア 窯の構造

別冊参照（二四）

寄稿青木氏へお願い

（編集者）

貴稿まだ前号と併せて百三十二ページの中、やつと二十六ページまでギョウ  
けたところ、あと尚百ページ以上が残り、説明付図版が二十九図あるそこで  
二心三意で打ち切り、原稿を次のように扱おうと致し。

○ 木炭製造について専門の技術記録であるので、私の手許（史談会）に、こ  
のまま預かり、佐伯において木炭製造再開の機会まで保存する。  
○ ページを適して打ち、現在の三冊を一冊に合せて、目次その他必要と思わ  
れることを若干そえ書きして製本し、見易いようにする。

○ なお機会があるなら、部分的に「佐伯史談」紙上に要載することもあ  
る。○ 貴重な貴下の記録を右のようにして佐伯史談会にいたされたたい。